

講演シンポジウム

都市・空間・ブルース
その1 人類学的
その2 神話・共
その3 幻点もし

裏切りながら裏切らないという証明のために始めたゲームが、風景の失総によって裏切られたので、今あなたは悲しみと怒りとの区別がつかない。やがて<社会>という調教師がやさしく柔らかに調教してくれることで、あなたは渡りに舟とその舟のところを得る。その時あなたはこういう言葉を考え出す。

にげもかくれもいたしません

<わたし>はここで生きてます。

一方私たちはあなたから少し離れて何を始めようとしているのか。

コミュニケーションへ向かう表現

序論の序

<市場>で交換価値としては平等である労働力商品所有者の<出会い>は、生存の第一義的条件を得ることの必要として、買手を買われ、労働各部門に編入される。そしてベットタウンと仕事場を往復する油虫となる。この油虫にもたまさかに「目ざめつつ<夢>みる」瞬間感覚のおとづれることがある。私が何処にいて、私が何者であって、私が何処へいこうとするか——このことをエリアーデは聖と俗とは世界のなかにあるふた通りのありかたであって人間が歴史のなかで形成してきた二つの生存状況であり、この感覚を聖体示現とのべ、工業化を誘因とする俗なる生存のなかにも聖なる空間体験に固有な非均質性を想起させる価値の浮かびあがることもあり、全く非宗教的な人間にとってさえ或る特殊な<独自の>の意味をもっている。つまりそれらはその人の個人的宇宙の聖地であり、日常生活の現実とは異なる或る現実が開示されるかの如くであるとのべこれを<潜在宗教的振舞い>と述べ、聖なる空間の示現は人間に<固定した点>を与え、それによって混沌たる均質の中で<世界を創建し> 現実生きる見当づけの可能性を与えると述べており、示唆的である。——この感覚の持続は<歴史>という小うるさい姑を前にして可能であるのだろうか。

しかし<夢>はつねに醒めてしまうことが望まれ、決してみつづけようとは望まれなかったのである。みつづけようとする者は<物笑い>にされてきた。又、その物笑いのなかに悪意を見てしまった者——この悪意は第一義的な生存の条件に必要な<たてまえ>を自然化することにおいて、「生活がある」「生活がない」という道徳的価値判断をして調戒をたれ、きかないとすると無視と侮蔑と村八分をおこなう。この無視のイメージとして「男は黙って……」というテレビのコマーシャルの口もとについた泡を一気呵成にけちらす男の場面に象徴される——は、あるいは悪意の予感を感じてしまった者——この予感の昔の学生運動の活動家が感じていたもので六十七年十月八日以降、「10・8ショック」とやらで、おとしの日大、東大闘争、と張り切った全共闘若手諸氏にはあまりいいものである。このことをのみメルクマールにしてほめちぎるバカな全くダメなジャーナリストが多い。<いつか殺してやる>——は、「二〇才の頃には、おおむね、人間を光明のない運命の手に委ねる結果に落ちつくものだ。」(ブルトン)

おしえてほしい涙のわけを

見るものすべてが 悲しくみえるの

夕月うたう 恋の終りを

思考
同幻想・物象化
くは 浮名の黒幕

今でもあなたを愛しているのに

おしえてほしい、忘れるすべを

つきまとう幻影 あなたの面影

夕月だけに愁いを語る

涙をあなたにふいてもらいたい

この社会という名の調教師——これはマルクスが一般的に述べた限りでの「支配者階級の思想は、いつの時代にも支配的思想である……支配的思想とは、支配的な物質関係以上にものでもない、したがって、ある階級を支配階級にするところの、まさにその諸関係の観念的表現であり、その階級の支配思想である」という意味の比喩以上のものでしかない——この調教師に調教されることを望んだ<生>はあてどもない擬似的観念移行の旅に出る。そこに発見される<盛り場>。

涙かれても 夢よかれるな

二度と咲かない 花だけど

夢の夢のかけらを

せめてせめて心に

ああ永久に散りばめ

逢わずに愛して いついつまでも

この唄たち、想い入れの共同性に彩どられた唄のなかを果してあなたが歌う唄があるのだろうか。あなたは白茶けた悪のりを感じ、あなたのなかに誰かが黙ってにらみつけているのを感じる。あなたは、明日の仕事が気にかかる。一朝、目醒めて、昨日の誰かが黙ってにらみつけていたのを忘れる。あなたはそのにらみつけていたのを深り起こさなければいけない。

唄を歌えず、ひたすらに黙々とするほかの沈黙に、支配的言語に侵しよくされつつ唄えない<沈黙>の内側に生きついでているもの。象徴的思考は子供や詩人や錯乱者の独占的な領域ではない。それは人間存在と切り離すことができぬものである。……シンボルは他のどんな認識方法もとらえることのできない実在のもっとも奥深い側面を明かすみに出す。イメージ、シンボル、シンボリズムは魂の無責任な創造物ではない。それらはある必要性に答えているのだし、またある機能を果たしているのである。つまり存在のもっとも内密な様態を剥き出してみせるのだ。(エリアーデ)——この<もの>こそ復讐されねばならない。

今ある生存のなかでこの<もの>の復讐をはかりつつ、支配的言語に侵しよくされてある<言葉>を解体しつつ、自からの表現に向かう<言葉>をつくりあげなければならない。